

研究会報告

第 62 回 東京医科大学循環器研究会

日 時：平成 27 年 5 月 16 日（土）

午後 2:00 ～

場 所：東京医科大学病院 第一研究教育棟
3 階 第一講堂

当番世話人：東京医科大学病院
小児科 河島 尚志

1. 出血と塞栓症を繰り返し治療に難渋した慢性血栓性肺高血圧症の急性増悪の 1 例

（循環器内科）

嘉澤脩一郎、山下 淳、富士田康宏
廣瀬 公彦、荒井 梯子、星野 虎生
斎藤 哲史、村田 直隆、小平 真理
田中 信大、山科 章

（戸田中央総合病院 心臓血管センター内科）

木村 揚、内山 隆史

症例は 70 歳代女性。急性肺動脈血栓塞栓症の既往があり、後に慢性血栓性肺高血圧症（CTEPH）と診断されていた。右心カテーテル検査で平均肺動脈圧 44 mmHg、肺血管抵抗 $770 \text{ dyne} \cdot \text{sec} \cdot \text{cm}^{-5}$ と高値だったが、保存的に加療されていた。今回 CTEPH が急性増悪し、ショック状態で搬送された。血栓溶解療法を行ったが、下血をきたした。内視鏡的に止血できたため抗凝固療法は継続した。ショックは離脱できたが呼吸状態が不安定であった。再評価目的で行った肺動脈造影で、新鮮血栓を認めたため、再度血栓溶解療法を施行した。しかし、大量下血をきたし、血栓溶解療法、抗凝固療法を中止せざるを得なくなった。翌日突然心肺停止に至り、蘇生中に行った肺動脈造影では巨大血栓を認め、再度血栓塞栓症を来したと判断した。

CTEPH の外科的治療を決定すべき時期や急性増悪時の侵襲的治療や血栓溶解療法の適応など示唆に富む症例であり、本会に提示する。

2. Na チャネル阻害薬によりコントロールし得た新生児早期発症の WPW 症候群の一例

（小児科）

石井 宏樹、廣瀬あかね、春原 大介
赤松 信子、奈良昇乃助、菅波 佑介
近藤 敦、河島 尚志

（循環器内科）

渡邊 雅貴、矢崎 義直、山科 章

【はじめに】

Wolff-Parkinson-White（WPW）症候群は房室副伝導路の存在で生じる早期興奮症候群で、約 30% に発作性上室性頻拍（PSVT）を合併する。新生児期に発症する PSVT は心不全により重篤な状態になる可能性があり、適切な初期治療が重要である。早産低出生体重児において、基礎心疾患のない新生児期早期発症の WPW 症候群の報告は少ない。新生児期早期の PSVT で WPW 症候群と診断し、フレカイニドでコントロールできた症例を経験したので報告する。

【症例】

妊娠経過で胎児不整脈の指摘なし。在胎 32 週 0 日、緊急帝王切開で出生。出生体重 1,580 g。出生後経過良好であったが、日齢 6 に心拍数 290/分に上昇。Narrow QRS より上室性頻拍と判断。アイスパック法を試み心拍数 150/分に安定。非発作時の 12 誘導心電図で PR 間隔の短縮とデルタ波の存在により WPW 症候群と診断。日齢 8 に同様な発作が出現し 12 誘導心電図測定中にアイスパック法を行い房室回帰性頻拍と診断。その後も発作頻発したため日齢 17 よりフレカイニドを 2 mg/kg/日以内服開始。その後 4 mg/kg/日まで増量し、発作回数が改善したため日齢 54 に退院。

【考察】

臨床経過よりフレカイニドが著効したと考える。循環不全が出現することなく早期診断により治療開始できたことから、新生児期 PSVT の早期介入は重要である。

3. 心不全患者に対する肺内パーカッションベンチレーター（intrapulmonary percussive ventilator ; IPV）の使用経験

（茨城 循環器内科）

小松 靖、田辺裕二郎、大木健太郎
相原 由佳、後藤 雅之、阿部 憲弘
小川 雅史、加藤 浩太、田中 宏和

肺内パーカッションベンチレーター（intrapulmonary percussive ventilator ; IPV）は、肺内をパーカッションしながら呼吸補助を行う理学療法を伴った人工呼吸器である。気道を段階的に拡張し、肺内分泌物の流動化や排痰の促進、さらに呼吸補助作用を有しており、慢性呼吸器疾患や無気肺によい適応がある。肺うっ血を伴う心不全患者では、気道分泌物が多く無気肺を合併しやすく、酸素化を妨げるため